

合同領域会議「物と命」

2021年9月9日(水)

田村光平氏(東北大学・学際科学フロンティア研究所／東北アジア研究センター)

文化現象を進化生物学の理論や手法をもちいて解析するアプローチを文化進化とよぶ。ニッチ構築の概念やモデルも、文化形質に関連するものは「文化的ニッチ構築」とよばれ、文化進化の研究の中で重要な役割を果たしている。本発表では、先史考古学を中心に、文化進化研究におけるニッチ構築の数理モデルや関連する議論について紹介する。

佐野勝宏氏(東北大学・東北アジア研究センター)

ヨーロッパでは、ネアンデルタール人と現生人類が少なくとも7000年間共存していたことが知られているが、前者が4万年前に絶滅してしまうのに対し、後者は徐々に人口を増やしていく。この謎を解明するため、イタリア南部カヴァロ洞窟で出土した4万5000年前のホモ・サピエンスの石器を分析した。その結果、彼らはネアンデルタールとは異なる複雑な階層構造を有する狩猟具を操り、生存競争において有利に立つ事ができた可能性があることが明らかとなった。発表では、その研究成果を紹介する。

鈴木麗璽氏(名古屋大学・大学院情報学研究科)

生物による環境変化に基づく自然選択圧の改変であるニッチ構築と生態継承は、オープンエンドな進化を理解するカギの一つであると考えられている。今回は、仮想の二次元物理間上において生物が物理構造を創り出すことで適応し、また、その構造が次世代に受け継がれる仮想生物進化モデルを用いて、ニッチ構築行動の進化と生態継承の関係について検討する。また、言語を文化的ニッチの集団とみなした言語と言語能力の共進化モデルについても紹介する。

石井匠氏(国立歴史民俗博物館)

私たちは、モノ＝道具をヒトの器官機能を拡大・延長する客体物として認識している。しかし、古代日本語の「もの」は「物・者・鬼(もの)」の意味が並列し、3者は三つ巴の関係にあるため、古代以前の人々は、非生命の「物」と超自然の「鬼」を「者」と対等な主体的他者として認識していた可能性がある。この観点から古代以前のモノを考察する時、モノの主体性や身体性、ニッチ構築しているモノという視点を導入する必要性が生じる。